
世界の漂流者 in ネギま

一条 櫂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界の漂流者 in ネギま

【Nコード】

N7288Y

【作者名】

一条 櫂

【あらすじ】

平凡とはちよつと違う生活の中、父の遺品から異能と呼ばれている力を目覚めさせ、それ以後は様々な世界を見て渡り歩き、常に戦い続けて来た少年（？）の物語。

多くの世界を見て、感じ、その世界で幾つもの結末を迎え入れた行き着いたのは、『魔法先生ネギま！』の世界。

転生モノとはちよつと異なる二次創作小説です。

最強モノやアンチ、原作ブレイクetcを含みます

プロローグ 『牢獄の終わり』（前書き）

と言う事で、形になり始めたところでプロローグを投下してみました。

まだ此処では名も出ていなければ、転生モノの様に神様などが出てくる描写もなく、色々吹っ飛んでますが……

それはさておき（まで）、随分寒くなりましたね。

プロローグ 『牢獄の終わり』

「ぐっ……！」

展開された何十何百と言う術式陣に自身の生命力を随時、魔力・法力・霊力・妖力の四つへ変換させて供給を行う。
身体中に痛みが走る。

打ち付けたような、押し潰されるような、斬り付けられたような、刺し貫かれたような、引き裂かれたような。
痛覚に痛みを伝えてくる。

幾度と繰り返し感じた痛みであっても、やはり痛いものは痛いものだ。

「ッ

！！」

声にならない叫びを上げる。

まだまだ、術の発動までは遠い。

未だに十分の一にも満たない、展開済みの術式陣を、更に重ねること十度。

描き、重ね、織り交ぜ、示し、伝い、流し……

『世界』そのものを、塗り替える。

『世界』と言うものを、書き換える。

この世界が、果てなく続くようにと願いを込めながら。

百十四度と繰り返し返された、この牢獄の世界を。

百十四度目の、『世界昇華』を。

たった数年、もしくは数十年しか続かないであろう、『物語の世界』

を、『ひとつの世界』として、造り変える。

「チツ……」

背中が急に軽くなる事に対し、舌打ちする。

重心を両足から左足のみに変えて、重心を保つ。

背中の右側の翼が一枚、崩れ落ちた。

それに続くように、左側の翼も一枚、崩れ落ちる。

急激な力の消耗に、受けられる恩恵が途絶していく。

また一枚、また一枚と、七対十四枚の翼は、崩れ落ちていく。

額から生える、歪こまな二本の角も、

頭部にある獣の耳も、十本の尾も、尖とった犬歯も、

自分に宿る力が、還元されていく。

「コアバス核翼……!!」

足りなくなりつつある生命力を、異なる力で補う。

三十二対六十四枚と、余った一枚の、翼とも言い難い、硝子の破片とも言えるそれを展開する。

けれどやはり、一枚一枚明滅してその形を失っていく。

決定的に、力が足りない。

「あああああああああああつ!!!!」

蒼い左眼も、紅い右眼も、顔を覆う白と黒の文様も、次第にその色を失っていくのが分かる。

どれだけの力を持っても、

それがどれほど、世界樹や神と言える存在達に匹敵するものであつ

ても、

戦うだけの力では、本当の意味で世界を変えるなんてのは、無理なこと。

だから、その世界樹や神に請う。

自身を見て、信じてくれる、世界樹や神々に願う。

声が交わせるのなら、またか、と呆れながら言っただろうか。けれど、今だけは

これが、この牢獄^{せかい}の終わりであって欲しい。

そう、願いたい。

「術式展開……っ！」

『世界昇華』の術式を展開し終え、続け様に違う術式を展開する。世界と世界の狭間に存在する『次元の狭間』へ到達する為の召喚術式『断界門』。

術式を展開し、詠唱文を捧げ、展開を進めていく。

「はぁ……はぁっ……まだ、だ……」

息が苦しい、視界が霞む。

音も遠く、手足の感覚すら失い始めてきた。

けれど止まる事は許されない。

止まっではいけない。

立ち止まる事だけは、許されていない。

「ひら、け……だんか、い……もん……」

ちゃんと言葉に出来ているかは分からない。

でも、空間の歪みが生じる事で、世界の扉が開いた事を、霞んで見えなくなりはじめた視界が捉えた。

「導け……」

吸い寄せられるように、世界の扉へと向かう。

足を踏み入れ、『世界昇華』の術式が作動し、世界が歪んだのを確認する。

また、ひとつの世界での『生』を終え、違う世界を目指す。
今度ばかりは、この牢獄の世界から、抜け出せるように、と

プロローグ 『牢獄の終わり』（後書き）

短編として以前投稿した『世界の漂流者』のその後です。
とは言っても、主人公の時系列では、その後と言っても故郷に別れを告げてから、主人公の体感時間で約千百年間かかっていますので、かなりアレですが……。

兎も角、原作にちゃっちゃんと関わっていききたいですね。
それではまた次回？

プロローグ・2 『世界と、出会いと、故郷の夢』（前書き）

とりあえずプロローグ第二話投稿。

行き着いた場所は、ネギま！の世界。

メインヒロインとか決まっていますが、始まりの場所からある程度定まっているような気がしている。

一応、主人公は原作と言うものを知らない設定です。

プロローグ・2 『世界と、出会いと、故郷の夢』

いつもと変わらない時間が流れていく。

いつもと変わらない別離が訪れる。

いつもと変わらない戦争がある。

過去も、未来も。

ずっとずっと、起こった事も起きる事も、同じで。

この千六百年間、ずっと変わらない時間だけが流れていった。

ただ違うのは、別々の世界で、そこで仲間になった者達、取り巻く環境、時間の流れ……

そう言ったものだけが、違っていて。

けれど、そこには絶対争いがあり、例え無くても、火種はあつて。自分がいて、争いが起きて、命の奪い合いになり、世界はひとつの歴史に幕を閉じ、自分はそこから居なくなる。

それは多分、ずっと変わらない事で。

戦う以外の意味を探して、世界を彷徨い、気が付けば結局、戦う事しか出来なくて。

ただ、望まれるがままに、力を奮い、先導し、勝利をもぎ取り、違う世界を目指すだけ。

ずっと変わらない。

きつと永遠に。

死すら失った自分の、罪であり、罰であるように。

ただ永遠に、永久に、続いていく、血の臭いしか漂わない……人生。

瞼の向こうが、光で明るい。

目を見開けば、やっぱり太陽の光が差して、少し眩しい。

「うう、は……」

知らない天井、なんてありきたりな言葉が、そのまんま現状に当て嵌まるのが、若干悲しい。

建築様式は、極東の島国……なんて言うのと怒られるかもしれないが、日本らしい木造建築の天井。

まあ、自分も一応は日本生まれの日本人なんだから、自分の国を卑下するようなことはしたくない。

……そんな事言っても、千六百年も生きて、色んな世界を見て回っていると、そんな事もどうでもよくなってしまう。

「いやいや、その前にここがどこだか確認しないと」

まだ少しボーっとしている頭を覚醒させるように、軽く頭を振る。バサバサ、と長い前髪が鼻や頬をくすぐる。

視界はいつもどおり、左半分だけ。

右半分……右眼に手を当てれば、いつもと変わらない眼帯がある。後ろ髪を掻き上げ、どれだけ長いかを確かめている。

いつもと変わらない、無駄に長い髪だ。

「やっぱり、日本……だよな……」

自身を確かめる過程で部屋を見渡すと、やはり日本だ。
畳や襖なんて、特にそう。

日本の存在する世界ではなくても、近い建築様式をする世界はいくつもあるけど、大抵の場合は日本だ。

この世界の暦が、西暦である、と言った方がいいのだろう。

「……うん、西暦って言えば、しっくりくる」

そんな感じで頷きながら、とりあえず自分が寝ていたらしい布団から抜け出して、襖を開ける。

「おお……」

つい感嘆の声が漏れる。

砂庭式枯山水……で合ってると思うが、立派な庭園ですこと。

……いや、そうじゃなくて……いや、確かに立派ではあるが。

兎に角、縁側とか、日本庭園とか、正に日本らしいと言っか何と言っか。

しかし、見た感じでは建物の中では中枢から少しずれるくらいの位地だろうか。

周囲の通路が多い事から、多分間違っではないと思う。
とりあえず、周囲の人の気配を探ってみる。

「……人の気配が多い……」

人の気配は確かにあった。

すぐ近くに一人、少し離れた所には十数人、それよりも離れると、

四方向に合計六十人くらい？

寺か神社か、何かなのだろうか。
それに……

「……結界？」

広範囲の結界が張られている事に気付く。

結界……それも、東洋独特の術式のもの。

神道か、陰陽術か……多分、その辺りだとはおぼろげではあるものの、分かった。

寺か神社か、と言う推測はどうやらあながち間違っちゃいないようだ。

由緒ある家系などでは、拠点などに結界を張るものだ。

魔除けや妖除けと言ったものを。

「そうか……逆に考えれば、“そういうもの”がある世界なのか……」

そう判断する。

未だに覚醒しきっていない頭は、今より僅かに前の記憶を呼び覚ますのに酷使し、思い出してみる。

「っ……」

ノイズがかかったように、やはりおぼろげにしか思い出せない。

けれど、三百年もの間、たった数年間の世界を何度も何度も繰り返し返していたのは思い出せた。

抜け出せない牢獄の世界。

戦乱の世を走り続けるしかなかった、あの世界。

「……とにかく、抜け出せたんだな、俺は……」

その事に安堵する。

あの世界は、本当に厄介だった。

ひとつの世界が物語としての結末を迎え、その世界から去ると、気が付けば似て非なる世界に墮とされる。

そんな世界を何十回も繰り返し、今、やっと俺は抜け出せたのだと自覚する。

「ははっ……」

乾いた笑いが漏れる。

「そつか。やっと、終わったんだな……」

味方だった者が敵になり、敵だった者が味方となる。

それを繰り返さなければいけない世界だったから、正直、狂ってしまいそうだった。

……いや、もう既に、狂っているのだろうけれど。

「あ、目を覚まされたのですね」

不意に声がかかる。

声の聴こえた右方向を見ると、水の入った桶とタオルを持った、巫女装束の少女。

……なぜ、巫女？

いや、神社とかなら別におかしくはないか。

「えっと、俺は、一体……？」
「ああ、少し待っていてくださいね。今、長様を呼んで参りますから」

巫女装束の少女はそう言うと、サッサと小走りに走り去る。

……と思いきや、咄嗟に止まってこちらを向くと戻ってきて、俺が寝ていた部屋に入って桶を置くと、また走り去っていった。

「……待てって言われたし、とりあえず待ってみるか。状況も把握できていないし」

軽く捻りを利かせて右向け右。

目指すは寝ていた部屋。

歩きだして、入って、適当に座るだけ。

なんだが……

「……おかしい」

ふとそんな言葉が漏れた。

いや、うん、気付かなかった方がおかしい。

「……はあ……」

自分の手を見て、身体を見て、そして重い溜め息。

「やっちまったなあ……」

どうやら、身体が縮んでいる。

多分、俺がまだ人間だった頃の……六歳くらい。

そりゃ、あの巫女装束の少女が俺より背が高いはずだ。

だが……うむ。

「タイムドロップか……これまた厄介だ」

可能性としては、有り得無くはない。

覚醒しきった頭で、思い出せる最新の記憶を呼び起こせば、世界から離れる際に、神さん方の力を借りて世界の構造を変化させたのだ。世界昇華、とでも言えればいいのだろう。

世界の構造そのものを変化させ、“世界としての寿命”を延ばす。ただそれだけの事。

勿論、難しいと言つか、まず可能な事ではない。

世界と言うのは、世界樹と呼ばれる最上位の存在や、神々などの神格ある存在、そして生命の想念などで成り立っているものだ。

ただ、それが可能だったのは、自分と言う個人が、多くの神々との契約状態にあった事や、世界樹と言う世界の始祖と良き隣人であった事が第一に挙げられる。

そして、その世界が、真の意味で、ただ想念^{おもい}だけで形作られた、短命の世界であった事が理由だ。

その構造を世界樹や神々の力を借りて、神の管理する世界として変換し、崩壊を招かせず、常に正常の状態に保つと言うだけ。

三つ目の理由として、自分が『神の力』を使えた事。

これは、故郷の世界で『異能』と呼ばれる、神が人間達に悪戯に与えた力があつたからだ。

世界生誕の『創造』と『破壊』の二つの異能を持つてして生まれたのだから、ある意味生まれながらにして人間じゃなかった、とも言えるのだろうが。

勿論、それ自体も特殊過ぎる条件下での事だから、出来る事自体がおかしい。

それでも出来てしまうのは、生きてきた中で『力』と言うものに渴望し、手に入れてきたから……になるんだろうか。

そして、その反動が、現在^{いま}。
知識上、五大元力と呼ばれている、氣力、魔力、法力、靈力、妖力の五つに併せ、

多種多様の種族の力や異質な能力を使えば使うほど、自分の身体は時間を遡る。

そうは言っても、身体年齢は十八の頃から止まってしまっていて、身体と言う時間を逆行出来るのも経験上では六歳の頃まで。

そう考えると、『俺』は自身の許容量の限界まで、『力』を使ってしまったのだろう。

意味は異なるが、『異形』と呼ばれる世界のはみ出し者達に与えられた、呪いのようなものだ。

種と言う枠に収まらなくなった者達……『異形』の者は、“本来の自分”の許容量を遥かに超える力を使うと、身体の時を遡る。

例えば、自分で言うなら、異能を持った人間、と言う許容量しかない。

勿論、多少なりと氣や魔力はあっただろうが、それも計算しても、たったそれだけでしかない。

その異能を持った人間と言う『個体』の枠から外れ、『異形』になる事で、それ以上の力を使う事が出来る。

とは言っても、過去に会った事のある同じ『異形』は、たった六人しか会った事が無い為、実際にはどういう条件下で引き起こされる現象なのかは定かではないが……

推論でしかないが、人間と言う枠の中に、『異能』や『種族の力』などの先天性能力や、『魔力付与』などによる恩恵、高位の存在との契約などで、加算された分が、その個人の力になる。

だが、『異形』と言う種族は、力を使おうと思えば、“自分の方から世界へ干渉出来る”、世界樹や神などの存在に近い、イリーガル

な種族。

老いることなく、死ぬこともなし。

勿論、消滅と言う形で『死』を得られるが、魂の輪廻に再び戻る事は出来ない。

これは肉体も魂も、在らぬものとなるからであるが……まあそれはさておき。

本来の自分の許容量と、加算された許容量までは、『異形』としてのキャパシティだ。

しかし、『異形』はそれ以上の力を引き出す事の出来る異質な種族であり、『異形』としてのキャパシティさえも超える力を容易に使用出来てしまう。

敢えて言うなら『異形』とは、“不自由であり自由ではない”種族、と言った感じだろうか。

ただでさえ、本来のキャパシティより超える力を使うだけで、“代償”を支払う必要性があるのに、異形としてのキャパシティさえも超えれば、その代償は遥かに大きくなる。

自分の場合では、本来のキャパを超えれば、その分だけ『感情』を代償として支払う。

力を使えば使うほど、感情のない存在へとなっていく、と言う事だ。無論、ある程度時間が経てばそれも回復する。

そして、異形のキャパを超えた場合では、その分だけ『時間』と『力』を代償として支払う。

時間は既に言った様に、肉体的な時間を逆行する。

六歳から十八歳までの十二年間の時間を、超えた分だけ支払う。

力は、言うまでも無いが、魔力などの五大元力や、異能の力、取り込んだ異種族の能力など、“発現し、情報を改変する力”全て。

「……となると、今の状態で使えるのは大して“深く”はないか」

拘束具の解放が出来ても、取り込んだ種の力は使えないし、後天的な力も殆ど使えないだろう。

良くて、魔法や魔術、あとは氣術関連。

“ 身体的時間の回復 ” を待てば、順次戻ってくるだろうが……。

無論、『異形』は“ 不自由であり自由でない ” とは言え、どんな種族から迫害を受けるに等しい、神さえも敵視するイリーガルな存在なのだが……。

そんな思考の海を漂っていると、氣配を探る必要もないほど、誰かが近くに来ているのを感じた。
七人、か。

「やあ、目を覚ましたんだね」

縁側の廊下から顔を見せて、膝に手をつきながらそう言ったのは眼鏡のおっさん。

おっさん、誰？……なんて言葉は流石に失礼である為、口には出さなかったが。

「貴方は？」

六歳と言う身形を使い、首を傾げながら、見上げる。

……ちょっと、鳥肌が立った気がした。

「私かい？ 私は近衛詠春。この神社の神主……と言っても、分からないだろうね」

六歳の子供と言う、見たままの人間だと思っている、と見てもいいのだろうか。

こっちの見解じゃ、もう丸わかりだって言うのに。

……今の俺じゃ破れそうにはないが、かなり上位の結界に、この近衛詠春と言った奴は、多分戦士か何か。

身のこなしとかは正に前衛系の典型と言ってもいい。

血の臭いがしないのは、現役から離れたからか？

「君の名前を聞かせて貰えるかな？」

「戒人……」

敢えて名だけを名乗る。

こつ言う取り入り方は経験上の常套手段、とでも言った所か。

「苗字は？」

「……」

姓に関しては答えない。

どちらにしろ、長年名乗ってきた姓ではあるが、忌み名に近い。本来なら、姓も名も、違うんだから。

「……そうか。じゃあ戒人君。質問するけど、どうして君は庭に倒れていたんだい？」

「どうしてと言われても、自分には何も……」

分からない、と言うのは別に嘘ではない。

この世界に渡った時の記憶がない。

気を失っていたのであれば、記憶が無くて当然だろう。

「うーん……どうしたものかな」

近衛詠春はそう言って顎に手を当てて僅かに首を傾げ、あさつての方向を見る。

しかし注意は、“こちら”に向いたまま。

多分、俺がこの世界に来た時に何かあったのだろう。

……いやまあ、庭に倒れていたと言う時点で、それがあったと言う事実はあるのだが。

その事を含めながら、また違う注意を向けている。

憶測でしかないが、この世界に来た時、俺は“堕ちてきた”と言う可能性。

つまり、結界内に進入した際、何か反応したのであれば、“そっち”関係の存在だと言う事が確定する。

詳しくは分からないが、神社などで張る結界と言えば、魔除けかそこらだろう。

それに反応したのならば、俺は“そういうもの”と言う事になる。加えて言えば、元力……特に、魔力や妖力の類が知られたら、人間だろうが妖魔の類だろうが、そう言った関係者、又は当人である事も分かってしまう。

全く、厄介な所に堕ちてきたようだ……。

「あの、自分はどれくらい寝ていたのですか？」

なるべく丁寧な口調で、けれど、歳不相応の口調で尋ねる。

俺の言葉に反応するように僅かにこちらに向けている注意……いや、敵意に近いものが鋭くなる。

やはり、ただの神社などではないらしい。

それも浅い関係ではなく、深く結び合ったもの。

「君が庭に倒れていたのを発見したのは三日前の早朝だったよ」

と、六歳程度には分からないであろう言葉で答えてくる。

「と言う事は三日も寝ていたんですね」

近衛詠春の向こうに見える庭園の草木の種や色、澄んだ空気と気温の低さ、僅かな日の傾きから、今が春頃である事を感じ取りながら、俺はそう答える。

そして、決定的な言葉を添える。

それは起きた時から僅かに感じていた違和感。

身体的時間の逆行ではなく、身体が熱を持っているような感覚。

俺は確かに、落下、と言う意味で落ちてきたんだろう。

落下時のダメージで傷を負っているはずだ。

結界の効果範囲からしても、それなりの高さから。

けれど三日も寝ていたなら、速度が劣っていても大抵の傷なら治るはず。

「なら、“傷”は“治っていてもおかしくない”か……」

すると、やはり敵意の色が明確に見えてくる。

近衛詠春だけじゃなく、傍に控える巫女達からも、だ。

「……すみません、少し疲れました。休んでも構わないでしょうか？」

そう告げると、敵意は収めずに近衛詠春は言った。

「うん、しっかり休みなさい。次起きた時には色々話を聞かせてもらうけどいいかな？」

「はい」

俺は軽く頭を下げ、布団に入る。
そして、言い忘れていたように……

「ああ、“監視”は付けてくださっても構いません。貴方がたが自分を警戒しているのは、痛いほどに分かりましたから」

俺の言葉に反応を見せない近衛詠春は、それだけ苦難の道を歩んだのが分かったが、付き人の巫女達は動揺を隠し切れなかったようだ。
“そういう関係者”であるなら、もう少し鍛えた方が良いんじゃないだろうか？

そんな事も思うが、今はどうでもいい。

……疲れたのは本場で、身体が睡眠を欲しがっているのが、良く分かったから。

布団に入り、瞼を閉じれば、すぐに意識はまどろみの中へと落ちていった。

『力』なんてモノが、欲しかったわけではない。
ただただ自分は、平凡とは言えなくても、普通に暮らしたかっただけだった。

世界各国に支社を置く大企業・北条グループの御曹司なんて言われて、それは平凡とは言えないだろう。

けれど、それは兎も角、一人の“人”として、普通に暮らしていきたかった。

例えば自分が、研究材料や実験対象で、偽りの記憶を植えつけられた者であっても、自分は、与えられた生活が好きだった。

息子に声すらかけない父親に、流星は俺の子だ、って言うて欲しくて、色々学んだし、運動だつてできる様になった。

認められたかった。

家族として。

そして、父は再婚し、義母と義妹が家族に加わり、それからまた、一層幸せを望んだ。

金銭とかそう言うのは無しにして、ただ“家族”と言うものに憧れていたのかもしれない。

父・蒼矢、義母・亜夜、義妹・刹那。

父は忙しく、幼少の頃は義妹の刹那と共に、義母の家の雪村流剣術を学び、ある意味、趣味の様なものだったし、

義母は義理の息子になる自分に対して、初めて愛を注いでくれた人だった。

義妹に至っては、年齢は同じになるが、兄妹と言う関係になり、かけがえのない存在になっていった。

けれど、そこに父は居らず。

最早、父が、親として子へ愛を注ぐ、なんていうものを、忘れていくしかほかになかった。

だから、なのだろうか。

アメリカへと長い留学をする事に、何の抵抗もなく、ただ言われるがままに留学した。

自分は八歳の頃から、四年を掛けて大学を卒業し、義妹は六年掛けて卒業した。

二人とも卒業した事から、一度は故郷へ帰るという選択肢を得たが、結局それから四年間はアメリカで過ごしていた。

十年経ったある日、父の弟……叔父から一報が入る。

父と義母の事故死。

自分は父の死に対し動じることはなかったが、愛情をくれた義母の死にはさすがに同様した。

義妹に至っては、泣き崩れるほどのショックで、兄妹二人で帰郷した。

葬儀や相続、後継者など、様々な問題がありつつも、全て自分で執り行い、叔父に「成人するまで」と言う条件をつけて北条グループの社長代理まで任せたのは、今思えばかなりバカらしいものだ。叔父は白鳳学園の学園長でもあって、北条と言う家系では第二の権力者。

人柄も良いし、信用はできる人だった。

だから、『俺』は妹と二人、白鳳学園の高等科三年として、二年間と言う猶予を貰い、飛び級して大学を卒業した身でありながら、高校生活をする事になった。

あの時は流石に父親と言う者に対し、呆れ返ったものだった。

北条本家の邸宅が、白鳳島まるまる学園都市のほぼ中央部にあったのは仕方ないことだが、明け渡して学生寮にするなんて、全くふざけたものだ。

帰るべき実家が学生寮になる。

父に文句を言っただけでやりたかったが、亡き者に口などなく。

承諾せざるを得ず、一応寮長として自宅を守ったが……まあ、悪くはない生活だった。

……けれど、そこから『ちょっと違う平凡な日常生活』からは一転してしまった。

父の遺品。

小さな木箱。

その中に入っていた、大きな黒い眼帯。

それが、全てを変えてしまった。

きっと、それに気付かなくても、同じ事になっていたかもしれないだろう。

『故郷の世界』に存在した、独特な能力。

『異能』。

ただその言葉の意味だけでは、特異な能力に過ぎない。けれど、その力は大きなものだった。

神が、文字通り“悪戯”に、人に与えた『神の力』。

不完全とはいえ、神族の力だ。

様々な制限こそあれど、その制限の外では大きな……いや、大きすぎる力だった。

『創造』 『破壊』 『蒼血』 『紅血』 『白烙印』 『黒烙印』。

本来ならば一つ、稀有なケースであつても二つまで。

後にそう知り、本来ならばもう途絶えたはずの異能を持った、自分。

それが、“戦争”の始まりでもあった。

プロローグ・2 『世界と、出会いと、故郷の夢』（後書き）

と言う事で始まりは関西呪術協会本拠地から。

ある意味メインヒロインは木乃香や刹那辺りになるんでしょうか？

ちなみにですが、今回は前半や後半は、戒人の夢の様なものとなっています。

補足として

戒人の知る刹那、ネギま！の刹那が、名前に被っている点について。

これは元々、昔に創作で書いていた『故郷の世界』でのヒロインの名前が被ってしまったているだけですので、特にこれといって関係ありません。

プロローグ・3 『過去と、養子入りと、鍛練と』（前書き）

プロローグ・3、投稿。

主人公が最強？ まだまだ先の話だぜ（なに

何故か流されて養子入りさせられてしまう戒人君。

プロローグ・3 『過去と、養子入りと、鍛練と』

古い記憶の夢から覚めれば、今自身が居る『現実』に意識が戻る。

「……過去の夢なんて、いつ以来だろうな」

そう呟き、障子の向こうに映る影を見る。

多分、監視役を担った者だろう。

「本当に、出られたんだな」

再度、ここがあの“牢獄”と言ってもいい世界とは違う世界である事を確認して、身体を起こす。

「……これは、現実だな」

自分の幼い身体を確認して、溜め息を漏らす。
こっちだけは、夢であって欲しかった。

「起きられましたか？」

不意に、障子の向こうの影が動き、声をかけてくる。

呟いた声が聞こえたのだろう。

「はい」

「では、少々お待ち下さい」

答えると、そう言われ、どうするまでもなくただ待つことだけを決める。

どちらにせよ、警戒されているのでは下手に動くことは出来ない。

「どうなるのかな、俺……」

今の自分では、戦う事は出来ても、それなりの実力者が居れば負ける事は確定的だ。

特に、“ココ”じゃ、相手の戦力はあるし、あの近衛詠春はかなりの実力者だろう。

……まあ、血の臭いが薄れている分、戦場を離れて数年は経っているのだろうが……。

状況も分からない状態で、いきなり対立するなんて選択肢を頭に入れている分、自分自身どうかと思ってしまうが。

「戒人君、いいかな？」

「はい、どうぞ」

近付いて来ていた足音が止むと同時に、声がかかる。

近衛詠春だ。

サツと障子が開き、近衛詠春と数名の付き人、そして二人の少女が入ってくる。

身体を起こしたままで、まだ布団の中だった事から、布団から出ようか、と考えて身体を動かすが……

「ああ、そのままで構わないよ」

と、近衛詠春に言われて、布団から出る事をやめて落ち着く。

「二度目になるけど、私は近衛詠春。そして……この子達は初めてだね。木乃香、刹那、挨拶しなさい」

「えと、近衛木乃香言います」

「桜咲刹那です……」

行き成り何だ？、と言う疑問が湧くが、兎も角先に名乗った少女の姓に、多分近衛詠春の娘だろう、と言う結論が出る。

「……戒人、です」

少々戸惑いながらもこちらも名を名乗る。

やはり、姓だけは伏せたまま。

「何故、この子達を？」

「二人は君の第一発見者だからね。話が早いだろう？」

敵視した相手の所に、弱みになる存在を連れてくるのはただ危険なだけ。

それでも連れてきたのは、何かしら理由があつての事か？

「はぁ……」

溜め息ではなく、相槌の言葉が出る。

「自分では此処に居る事さえも分かっていないので、それは助かりますが……」

「うん、そうだろうね。木乃香と刹那の話では、空から落ちてきたらしいから」

…… ああ、本当に落ちてきたんだ。

「戒人はんは、ケガはもう大丈夫なん？」

そう言ったのは、近衛木乃香と名乗った少女。

落ちてきた、と言う現場を見たと言った。

なら、擬音で言うなら、グシャリ、と言う現場も見たと思う。

だからこそ、心配する眼差し……なのだろうか。

純粋な子供だから、あれで死んだとかは考えにないのか。

ただ、服が甚平になっている事から、汚れていたから着替えさせた……と言うか、させられたのだろうか……うむ……

本気と書いてマジとかガチとか読むレベルに、血塗れだったに違いない。

「もう大丈夫だよ」

若干歳相応な口調になりながら、その上僅かに笑ってみせる所は、自分の身体に対して年齢を無意識的に合わせてしまおうと言う、悪い癖。

「それで、近衛詠春殿……自分に聞きたい事とは、何でしょうか？」

近衛詠春に向き直り、そう訊ねる。

そこで、もう必要ないと見たのか、二人の少女を退室させる。

確認の為に連れてきたようだが、ここまであつさりだと……何故連れてきたのがよく分からない。

「ええ、そうですね。ひとつは、何故落ちてきたのか。

そして、本山の結界にかかりながらも、そのまま結界内に入った事について。

最後に、君は一体何ものなのか……」

言い終えて、僅かに瞑っていた瞼を開き、こちらに視線を向ける。

そこには、前の様な明確な敵意はない。
そして、何がそこにあるのか、分からなくなった。

「……」

ジツと見てみるが、やはり分からない。

同時に、何から話せばいいのか、何を話せばいいのか、こっちは考えあぐねる。

…… 本当に、厄介な場所に“堕ちてきた”らしい。
逆に、保護や協力などが得られれば、それはこの上ない事。
だけど、それは紙一重。

利益にならなければ、確実に保護や協力などと言う形はあり得ないし、元々、こういう人間達は外部を嫌う性質がある。

魔法使い然り、魔術師然り、呪術師然り……つまりは、秘匿性のあるものは、可能な限り入れない事を重視する。

無論、それは秘匿性があれば、ではあるが……。

なら、ここで取るべき行動はひとつ。

自分も、相手と同じ、“そういう関係”の者であると言う事。
勿論、問題がない訳じゃない。

東洋独特、それも神社のような、そう言った組織か何かであるなら、海外…… 異国のものになるであろう術式は逆に警戒される可能性もある。

それでも、自分も同じ関係者である事を知らせるのは、下手に警戒されない為。

無関係者では最早筋が通らないのは分かりきっている。
たった三日で、大きく破損したはずの肉体が、元通り。

人差し指を立てて、ただ一言、唱えるだけ。

「グロウ
……灯」

指先に灯りが生まれたその瞬間、巫女達が敵意を剥き出しにしたのが分かる。

「なるほど。それは分かりましたが、戒人君が一体何者なのか、答えてはくれないのかな？」

このおっさん……やり難い相手だ。

「……見てのとおり、子供」

「うん、それで？」

……。

「……はあ」

ため息が出た。

「何者か、と言われても、どう答えればいいの分かりません。……ただ、言うのであれば」

そこで一息つき、

「ただ、この“世界”に流れ着いた、“漂流者”ですよ……」

魔法使いか魔術師とでも言えば良かっただろうか。

けれど、明確な答えではない。

敢えて言うなら、漂流者。

そう思って、そう告げる。

多分、自分を表すのなら、漂流者とか、遍在者とか、そう言う言葉が似合う。

流されるままに世界へ辿り着き、けれどそこにはいない。

何処にでも居て、何処にも居ない。

多分きつと、自分はそんな存在。

「……近衛詠春殿。貴方を信用して、貴方だけとお話したい」

そう告げると、逡巡した後、近衛詠春は巫女達を下がらせた。

「これでいいかな？」

「ありがとうございます。……では、」

それからたつぷり一時間かけて自分の事を話した。

異世界に住んでいた事、何かの拍子でこの世界へ流れ着いた事、気がつけば此処で寝かされていた事。

自分が魔法や魔術を使う、力を持った者である事。

言わずに済むところは、はぐらかす。

けれど、やはりやり難い相手で。

「それが全部、という訳では無さそうだね？」

そう言われるのも、ある意味仕方のない事で。

「……結界に引っかけた、けれどそれを抜けた。その理由は多分、自分が人間ではないから……じゃないでしょうか？」

もう少しだけ詳しく話して、その後に期待する事にした。

……で。

どうして自分は今、抱かれているんだろうか。

近衛詠春は、とりあえずは保護と言う形で自分をこの、“関西呪術協会”の本山と言う、この場所で一時的に身柄を保障してくれる事になった。

自分が話したのは、自分が生まれ、真実を知り、目的を果たすまでの五百年間を要約した話。

その上、その話を信じさせるために、自分の力を封じる　　と言っても、今では大した力もないが　『廻無の鉄』と言う眼帯を外し、解放できる所まで見せた。

正直、そこまで話せば、自分が異質過ぎる存在である上、排除すべき敵のはず。

それがどうして、保護と言う形でこの場で生活させる事になったのか。

いやいやいやいや、それはまだいい。

逆に良すぎるくらいで怖いのだが、それはこっちとしても正直ありがたい事だ。

だが、しかしな？

「ああ、かわええわあ……」
「うぐっ……！」

自分は今、近衛木乃葉と言う、京美人と言う言葉が似合う女性に、後ろから抱かれ、膝の上に居る状態になっていた。

「あはは。戒人君、気に入られたね」

いや、近衛詠春、アンタは笑っている場合じゃないだろう！？

「あ、あの、近衛詠春殿、これは……！」

「あゝん！ 逃げへんでもええやんか」

「いや、あの……」

力は大して強くない為、振りほどけないほどじゃない。

無理に振りほどけないほどじゃない……んだけど、何か振りほどくのは罪悪感がある！

「なんで……なんでこうなった……」

それから二週間ほど。

正確には、最初の三日と、目覚めた後の二度寝に一日を併せれば十

八日ほど経った現在^{いま}。

「……………はあ」

日課になりつつある溜め息が出て、布団から出る。

「本当に、何でもこうなったのか……………」

部屋を見渡すと、最初に見た部屋よりは全然違う部屋。

八畳ほどの部屋だが、正に純和風と言える室内は、自分に割り当てられた一室。

「流された俺が悪いのは、分かるんだけどさ……………」

正直、泣きたくなる。

今なら枯れた涙も流せるんじゃないだろうか、と思うくらいに。

「戒人様、お目覚めになりましたか？」

「……………あ、はい。起きてます」

巫女の一人が障子を開けて、礼儀正しく頭を下げ、ゆっくりと部屋に入ってくる。

なんと言つか、もう、正直……………いや、ぶっちゃけ、思い出したくない。

だけど……………」

『なあなあ、戒人君、ウチの子にならん？』

『……へ？』

『あなたも良いわよね？』

『はは……そうだね。木乃葉が気に入ったのなら、それも良いかもしれないね』

『いや、あの……？』

『戒人君は家族が居ないのでしょう？　ほんとにウチ、息子が欲しかったんよ』

『えっと……？』

『戒人君なら問題ないだろうし、私は構わないよ。戒人君もどうだろうか？』

『いや、ちよつと、まっ……』

『あゝ、ホンマかわええわ』

『うっ……く、首がつ！？』

あの時の事を思い出して、溜め息をつく。

「本当に、なんでこうなっただろ……」

「何か仰いましたか？」

「あ、いえ、何でもないです」

しかし……本当に、なんで流されたんだろ……。

自己嫌悪に陥るとかそう言うレベルじゃない。

今じゃ大した力もない、それなりの魔法使いより上程度の自分とは言え、千六百年間生きていた自分が、こつもあつさり流されるのは、本当に泣けてくる。

それだけ、あの近衛木乃葉と言う女性が、無慈悲にも優しすぎたと言っのはあるとしても……。

「それでは、失礼致しました」

布団を持ち上げた巫女さんは頭を下げ、部屋から去っていく。

「……ああ……」

本当にどうして……いや、もう何言っても仕方がない。
だが、だが……

「だからって、本当に養子にするなよ……」

異世界の人間で、更に言えば“人間だった”奴で、
この世界では疎まれているらしい吸血鬼とかの側面を持っていたり、
他にも狗族などの側面があったりと、

本当に厄介で複雑な奴……それに、異世界から来たんだから、戸籍
なんて当然あるはずもない。
それなのに……

“俺”は、近衛と言う姓を与えられ、父・詠春、母・木乃葉と言う
両親を持つ、子供となった。

あの日の翌日、一日中どうして流されたのかと自問自答しまくって
いたところ、

朝食を「家族だから」と共にし、妹になる木乃香と、その守護役で
木乃香と同年代の刹那と再度挨拶を交わし、

その日は母となった木乃葉に一日中遊ばれ(?)、昼食、夕食の後、
風呂になると母・木乃葉と一緒に入ろうなどと言い出し……

まあ……結果的には、父・詠春と一緒に入る事で何とか逃げ切った
んだけど……

「あゝあゝ……」

……それ以上は、思い出したら何か本当に自己嫌悪しか出てこない。
どうして自分は流されたんだ、本当に……。

何とかこの家……と言えいいのかよく分からないが、兎に角、近衛家での生活はさすがに慣れてきた。

勿論、母上　これでも母になった為で、家柄上そう呼ぶ事になっている　だけは苦手だ。

生活には慣れ、六歳である木乃香・刹那の両名と同じ歳であるとして、自分も容姿としては六歳である為、六歳として過ごし始めた。兎に角、生活する中で分かる事は、自分も所謂“魔法関係者”である事から父上からいろんなことを聞かされた。

敵視した相手に、何故息子として扱えるのか、と言う疑問はありありだったが、もうそれも考える事を止めている。

まあ、東西に分かれている大組織……西はここ、関西呪術協会の長は木乃葉の父にあたり、

東の麻帆良、関東魔法協会は一応自分の祖父にあたるというのだから、何かもう近衛って言う家系が恐ろしく見える。

もつと深い裏事情こそ知らないものの、時折父上の話に出てくる“大戦”の話から、“紅き翼”や“魔法世界”、“連合”“帝国”など、気にかかるものは色々あったが。

「……近衛戒人、か……」

偽名を使う事は幾度とあったが、姓名を与えられた事は少なかった。今回で五年度目だと記憶している。

偽名の方は、もう何度使ったかは、数えれば正確な数さえも思い出

せるだろうが、思い出すほどでもない。

そんな時、ぺたぺたと素足で廊下を歩く音が耳に入る。
僅かだが、足音を殺すもう一人の気配。
またか、と思いながら、小さく息を吐く。
溜め息ではなく、ただ一息ついただけ。
サッと障子が開けられ……

「戒人兄い、せつちゃんと三人で遊ばへん？」

そう言ったのは妹になった木乃香で、その隣には刹那がいる。

……“刹那”、ねえ……。

何度聞いても、少し気が重くなる名前である。

「ああ、いいよ。今日は何するんだ？」

「そつやな。せつちゃんは何がええ？」

「う、ウチは何でもええけど……」

養子に迎えられた二日後から、新しい世界で、新しい日常になった風景が、今日もまたやってくる。

こんな日々が、いつまで続くのだろうか？

どうしてこんなに平和なのだろうか、と思う中、このまま続いて欲しい、とも思いながら、

やはり、“俺”はどこまでも、平和と言うのが似合わないヤツなんだな、と再確認してしまう。

近衛家……関西呪術協会の本山では、多くの者が出入りしているのが分かる。

言うまでもなく、関西の東洋魔術を基礎とする組織の者達……つまりは関西呪術協会に連なる組織だ。

経験則だが、こういう“協会”って言うのは色々問題を抱えている事が多い。

寧ろ、抱えていない、なんてのはまずあり得ないと言ってもいいだろう。

特に関西呪術協会なんて、組織の集まる、巨大な組織。

そりゃあ問題だって抱える。

六歳の身形とは言え、千六百年もの間養い続けた知識は伊達じゃない。

……いや、伊達でもあるが。

俺は元々記憶力は良い方だった。

けれどそれは、僅かに一般より高い程度。

別に天才ではなく、ただ記憶力が少しいいだけ。

勉強だって、元々好きでやっていたわけじゃない。

でも、それが必要だった事もあるし、戦って勝つ為には色々覚える必要があった。

戦闘もそう。

基礎運動能力を身に付け、戦い方を覚え、数多の力もひとつひとつ時間を掛けて覚えたものだ。

初めて使った魔法は、『魔法の矢』。

この世界で言う、西洋魔術の『魔法の射手』と似た魔法。

まあ、西洋魔術とか東洋魔術とか、俺の知識上ではどちらも『魔法』でしかないが……まあそれはさておき。

何が言いたかったかというと、ただ“知識”の上で、組織って言うのは問題を抱えているものである事を知っているだけ。

それくらい、そこらの人でも分かる事だ。

完全な一枚岩になることは、殆どない。

組織の集まる巨大な組織であれば、なおさら。

関西呪術協会は大きく分けて、長である近衛詠春を筆頭とした穏便派と、多分幾つかの組織がくっ付いている過激派の二つに別れる。

長年、日本と言う一つの体系を守る関西と、外から入って来た関東の争いが絶えず、それをどう対処するか、と言う事で派閥ができている。

それ以前からあったのだろうが、そこまでは俺の知った所ではない。

正直、だからなんだ？、と言うところなのだが……。

「……なあ、詠春。……お前の家は一体、どうなってるんだ……？」

「いやあ、鶴子さんも素子さんも、元気だなあ……」

養子になってからは「父上」と呼んでいた近衛詠春を下の名で呼ぶ。

「母上みたいな人は、もう嫌だぜ……」

「まあそれだけ戒人君が好かれてるって事じゃないかな？」

それでいいのか、アンタは。

そんな台詞が浮かぶが、引っ込めておく。

俺が養子になってからは、父上は俺を下の名前で呼び捨てで呼ぶが、どうにも二人きりになるとそれは変わってしまう。

異世界で戦い続けた『異形』と、この世界の“魔法世界”と呼ばれ

る地で起きた“大戦”を戦い抜けた『英雄の一人』。
そう言う立ち位置になる。

俺は記憶の一部を見せる事で半ば無理矢理納得させたと言う立場だが、追体験するようにいくつかの記憶を見てもらったから、その後はいつも以上に老けてみえゲフンゲフン。

「母上は母上だからと割り切るけど、詠春の従妹は……何と云うか、おぞましいな」

「そこまで言うかい？」

「母上と同類なんて、俺には耐えられん……」

「あはは……」

苦笑する父上の表情に、若干同情に近い感情が混ざっているのが感じられたお陰で、こっちは頂垂れる一方だ。

青山鶴子と青山素子。

近衛詠春は婿入りで、旧姓は青山。

その従妹に当たるのが、青山鶴子と青山素子の二人。

養子をとったと言う報が出回ったらしく、二人揃って関西呪術協会の総本山へやってきた。

それからは、まともそうに見え、父上から聞いていたように腕の立つ二人だと聞いていたから、どんな女性なのやらと思っていた。

でも、本質とまでは言わないものの、母上に似た傾向の持ち主で。

……特に、鶴子さんが。

………

………

………

いや、思い出すのはやめよう。

まだ素子さんがまともで、救いの手を差し伸べてくれた事だけは、

記憶に留めて置く事にする。

「……ああ、そうだ」

「どうしたんだい？」

「父上、少し“鍛練”の相手になってももらえませんか？」

そう言うのと、僅かに父上の表情が変化したのが分かった。

「自分は自分の剣術を、父上は父上の神鳴流で戦って欲しいのです」

「……それは、どういう意味かな？」

「ただの鍛練ですよ。今の自分が、どこまで戦えるのか知りたいのです」

そして、

「それと、出来れば刹那を立ち合わせてください。彼女には剣の素質があり、素養さえあれば一線級にはなります」

「……未来的には刹那を戦わせると？」

「父上が木乃香の護衛につけるくらいですし、聞いた話では、鶴子さんが連れてきた烏族とのハーフの子らしいじゃないですか」

「そこまで分かるものかい？」

「それはまあ、同族意識に近いものを感じただけですが」

真意を確かめるように父上は俺を見る。

逡巡するかのようにほんの僅か、視線をずらした後……

「戒人は良い子ですね」

なんて言ってきて

「やめる馬鹿耳が腐る」

なんて反応してしまう所、俺は結構素直じゃない。

容姿がどうか、力がどうか、実際には大きな問題。

けれど、そんなものに拘っている余裕はいつかなくなる。

刹那と言うあの子に対し、僅かに同族意識を感じた。

でもその程度で、自分がとやかく言う心算はないし、更に言えば俺の方が圧倒的に性質が悪いだろう。

人間と鳥族のハーフ、と言えるだけマシにも思えるくらいだ。

あの子もいつかは、神鳴流剣士になっていく。

今の俺ではあまり感じられないが、東洋最大の魔力を持つらしい木乃香の護衛をするなら、強くなつて守つて欲しいと思う。

ただ戦うだけの力では、守る事は出来ないが、守りたいと言う強い意志があるなら、戦う力は守る力になる。

要は気持ちの持ち様で、ただの詭弁だろう。

だが、守れなかったときの悲しみや絶望なら、俺は良く知っている。

「いいでしょう。木刀でいいかい？」

「いえ、真剣で」

ニヤリ、と口の端を歪めてしまったのは、久しぶりと言うほどでもないが、結局は“戦い”を望む自分が居るのは、やはり俺らしいと思った。

あの翌日の早朝。

桜の木が一本植えられている庭に、俺は来ていた。

開けた庭は広大で、多少は大技になっても被害は地面が若干決れるくらいで済むだろうと一人頷く。

服装は白い着物の上に浅葱の袴。

父上曰く、神鳴流剣士の正装らしい。

腰には黒い鞘に収まった、黒い柄の日本刀。

日本刀とは言っても、六十六センチの小太刀。

帯電刀・来電。

今の自分が使える、武器であり、数少ない力のひとつ。

千五百年と言う、自分の生きてきた時間の大半を共に過ごした刀。

「おはよう。早いね」

「戒人様、おはようございます」

そう言っただけだったのは父上と刹那だった。

父上は同じく浅葱の袴で、刹那はいつもと変わらず赤い袴。

ただ、父上は腰に愛刀・夕風を携えている。

刹那は木刀なのは、やはりいつもの事。

「それが戒人の刀かな？」

そう言った父上の視線の先は、やはり俺が腰に差している刀。

「その通りです。父上もこの刀、見覚えがあるでしょう？」

記憶を見せた中では、俺がこの刀を振っている場面もある。

「一本で使うと言う事は、“雷の方”かな？」

「ええ」

そう頷いて見せて、右手で黒い柄を掴み、抜刀する。

黒い鞘、黒い柄、そして黒い刀身。

父上が“雷の方”と言ったのは、これと全く同じ姿形をした刀がもう一本あるからだ。

帯電刀・来電は、二振りでひとつ。

その片割れは風生刀・風切と言うのだが、今の俺ではそのどちらか片方を“召喚”するのがやっと。

名のとおり、帯電刀・来電は雷を、風生刀・風切は風を操る力を持った、いわば妖刀。

正確な呼称で言えば、雷を操る異能と、風を操る異能を宿した、異能力と呼ばれる代物で、神器や宝具と呼ばれる、神代のものや英雄達の所有物と同列に位置する武器。

同列とは言っても、能力的には最低ランクになるのだろうか……。

「さあ父上、抜いてください」

俺が言うと、父上も夕風を抜く。

長く細い刀身は、日本刀らしい美しさのある刀。

「勝敗はどうするんだい？」

「そこは俺と父上が決めた方が早いと思います」

そうだね、と言うところ、今この総本山では見て勝敗が分かるほどの実力者は居ない事が分かる。

元々分かってたからの提案ではあるが。

「あの、長様。これは……？」

「刹那君は良く見ていなさい。これから起きる事は試合ですが、限りなく死合に近いものだ、剣士同士の実戦なのだと思います」「え…… あ、は、はい！…… でも、戒人様は大丈夫なのですか？」

そんな刹那の言葉に、父上は苦笑する。

「まあ、見ていれば分かるさ」

俺はそう言って、足元にあった小石を高く蹴り上げる。

カッ

五メートルほど飛び上がり……

……そして、落ちる。

コトン

「ふっ ！」

瞬動術で瞬時に間合いを詰めて、己の右手にある得物を左下から右上へと振り上げる。

「ッ！」

それを受け流した父上だが、その表情には驚愕の色が見えた。

父上は、本当の俺を知らない。
ざっと150年分くらいは記憶を視ているし、瞬動を使う俺をその記憶の中で視ている。
けれど、500年の時間を話し、たった150年の記憶を見ただけ。1600年間の時間を、全て知っている訳ではない。
無論、父上は自分の扱う“雪村流剣術”を知っているし、その特徴だつてその眼で視ている。
そして何より、今の俺は弱い。
でも

技術まで失った訳じゃない。

「これはさすがに驚きましたよ?」

「驚くのは早いですよ、父上?」

技後硬直でもするかのように止まった、刀を振り上げた俺と受け流して防御した父上。

その体勢のままだったが、刃を返して振り下ろす。

それに気付いて受け流して防ぐ父上は、その後間合いを取った。

「今が**無鞘閃**ですか?」

「ええ、そうです」

互いに体勢を立て直して言葉を交わす。
無鞘閃。

雪村流剣術の基礎と言える技術。

その刀身を見せず、鞘に乗せて滑らすように振り抜く居合いを、鞘なしで高速に振り抜く。

氣が魔力のどちらかで刀身と腕部だけを強化して振り抜く。

硬度や威力を上げるのではない。

ただ速度を、剣速を早くする為の技術。

特に、“雪村納刀流剣術”と呼ばれる、雪村流の一派は常に扱う技術だ。

その後は互いの刀がぶつかりあい、幾度となく剣戟が少し冷たい朝に響く。

「ハッ！」

「ふっ！」

さすがに、強い。

そして、今の俺は弱い。

そう感じる。

この背丈じゃ刀も碌に振れない。

「くっ……！」

目の前に来た刀を、慌てて防ぐ。

考え事に耽ってちゃ、流石にまずい。

そう考えるや否や、父上が柄を捻った所を見て咄嗟に身体を伏せた。

「斬岩剣！」

鋭く風を切る音と共に発せられた声。

身体を伏せると同時に振り抜かれた刀が頭上を通り抜ける。だが、相手が強いと言っただけで、怖気付く訳にもいかない。

「りっかせん六花閃！」

起き上がりと共に来電を振り上げる。

最下段から上段へと縦に一閃。

体格差があるが故に避けるのは容易かったが、こちらの斬撃はリーチが短い。

身体能力も落ちている分、いつもより来電が重く感じているし。

無論、刀身の長さにも関係する。

一度互いの剣技を放てば、その後は荒れる。

「氷迎爪こりむねづめ！」

「斬鉄閃！」

幾度となくぶつかり合う。

神鳴流には驚かされる。

さっきの斬岩剣も、今見た斬鉄閃も、単純かつ効果的な技。

氣による強化……そして技量。

衰えた？ そんな甘いものじゃない。

父上の眼光は、戦場を潜り抜けた者の眼だ。

……何か、今思いついても胃が痛くなるとか言ってたのは、多分話に出てくる『千の呪文の男』サウザンドマスターの所為らしいけど。

それはさておき。

俺の剣術は、雪村納刀流剣術。

本来は異能としての力が弱かった雪村家が、自分の一族の氷の異能を上手く用いた接近戦闘術。

技を真似る事は出来るが、氷の異能を用いた完全な再現は出来ない、いわば贋作。

完成された剣術と、未完成の剣術。

どちらが上かなど、分かりきっている。

「行きますよ、父上」

僅かに口の端を歪めて言う。

「はは……次で最後にしようか」

夕風を構え直すところを見ると、流石に歳で長いこと戦えないのだから。

……老いは怖いな、老いは。

けれど、今の自分で父上についていけているのは、ただの錯覚。本当に殺し合いになれば、広範囲の奥義が放たれるんだろうが……。

「啼け、来電……」

氣を己の得物に流し、その力を発現させる。

帯電刀・来電は、雷を操る異能を宿した、異能刀。

異能『雷迎』^{らいよう}を所有する一族の、“人格”と“力”が宿る、妖刀。

……まあ、人格は今の状態じゃ目覚めさせる事は出来ないが……。

氣を流し、通し、循環させ、核玉^{かくぎよく}を目覚めさせる。

パリッ、と刀身が放電を始める。

「戒人、それはいけない」

それに気付くや否や、父上は言った。

「心配は要りませんよ。……今の俺じゃ、大した威力や出力はありません」

「む……そうかい？」

「ええ。尤も、今の状態でも全ての氣を注いで、広域殲滅系統の奥義を使えば、色々と吹っ飛ぶ可能性はありますが」

「……それは、勘弁してほしいな」

「大丈夫です。今は、対人用のを使いますので」

「戒人……父親を殺す気かい？」

「サムライマスターの父上なら、大丈夫かと思いますが？」

終始苦笑のままの表情で固まる父上。

まあ、無理もない。

俺の記憶の、重要な部分はいくつか見てもらっているし、雪村流と異能力を使った奥義もいくつか見ている。

無論、それは今より総合的な氣や魔力が遥かに上だった時のものだが。

トッ、と地を蹴る。

足には魔力を込めた、瞬動で。

来電には氣を流して力を発現させた状態で。

氷の異能が使えないからこそ、他の異能で代用した技。

「……雷迎衝！」

「百烈桜花斬！」

え、ちよつ。

そんな奥義使うなんて、父上が非情だ！

雷迎衝は良くて中の下なのに！！

放たれた雷撃は父上の神鳴流の奥義らしい技に相殺されて、ただの斬撃になる。

慌てて周囲に氣と魔力を拡散させて、簡易的な防壁として利用する。

「ぶぺっ！！？」

けどそんなじゃ防げる訳もなく、無様な声を上げて吹っ飛ばされた。

プロローグ・3 『過去と、養子入りと、鍛練と』（後書き）

試合を見ていた刹那が置いてけぼりな今回。

あと二、三回ほど話を入れたら、多分、きつと、原作開始までは入るかもしれない。

でももう少し序章は続けた方がいいかなあ、なんて思ってたかもしれない。

幼少時代としては、木乃香や刹那に深く関わらせていきたいかも？

補足

名前だけ出てきた鶴子と素子の出番はないと思う。

余談。

前回も書いたけど本当に寒いですね。

昨日の今日で見事に風邪を引きました。

プロローグ・4 『人と、人間と、戦場の臭い』

目が覚めると、ここ最近で見慣れた天井が最初に視界に入った。

前の記憶を思い出せば、父上を一発ぶん殴りたい気持ちに駆られる。

「ああ……吹っ飛ばされたんだっけ」

何とも情けないものである。

……。

本当に情けないものである。
再び思い出して、そう思う。

「あ、起きられましたか？」

声がかかって、その声が発せられた方を見る。

「刹那か……」

コクン、と頷いてみせる刹那。

「どれくらい寝てた？」

「一時間くらい、です」

時間を聞くと、すぐに帰ってくる。

「大丈夫ですか？」

と聞かれれば

「まあ、大丈夫じゃないのか？」

と返して。

……気まずい空気が流れる。

いや、たった六歳の子供でこんな気まずい空気とか、初めてで困る。

「ち、父上は何か言っていたか？」

「え？ えっと……いずれ私も戦う事になるから、修行は惜しまぬ様にと……」

「……ん。そつか」

俺はそう言っつて、つい刹那の頭を撫でる。

変に強気じゃない所は、“あいつ”に似てるなあ。

「刹那は、木乃香の事が好きか？」

「へっ!？」

「あ、いや、変な意味じゃなくてね？」

と言っつて通じるかどうかはさておき。

「うん。このちゃんは好き」

……“は”と申したか、刹那よ。

「なら、出来るだけ早く打ち明ける事だ」

「っ……」

「一線を引いてるから、隙が出来てしまう」

「どう、して……」

「ただの“同族意識”だよ。俺も、似たようなものだから」

そう言つてやると、刹那がキョトンとした顔をする。

「刹那は“人間”じゃないかもしれない。けど、刹那は“人”だろう？」

それはただの、俺の価値観に過ぎないだろう。

でも俺は、“人間”と“人”を分ける。

人間は、人間族。

人は、人。

俗に言う“人の心”を持つているなら、それは人と同じ。

身体的特徴や、種族としての力とか、そんなのはどうでもいい。

要は“人の心”があれば、それは“人”だって事。

それを理解するのは、六歳じゃ難しいかもしれないけれど。

「否定されるのが、拒絶されるのが、怖いのは分かるけど」

そうやって、一線を引いているから、遠慮が出来る。

まだ短い間とは言え、木乃香が刹那をどう思っているのかは分かっているつもり。

つもりと言っただけで、それは俺が見て感じただけのことではあるけど、

きつと、木乃香は友達として刹那を見ている。

ただの護衛とかじゃなく、対等の友人として。

母親が母親なだけあって、子も子だ。

人間と鳥族のハーフとか、そんなのはどうでもいいだろう。

だから、母上も父上も、刹那をこの家に呼んだのだろう。

「刹那は、刹那だろう?」

まあ、俺は否定される側の存在だから、苦笑するしかないけど。

「本当に木乃香が好きなら、守り抜いてやれ。俺は養子として近衛の姓を貰ったけど、言ってしまうえば、俺は刹那と同じだからな」

そう、同じ。

「それでも怖いのなら、自信がつくまでは隠したままでもいい。けど、いつかは話してやれ」

撫でたままだった手を止めて引くと、刹那は顔をあげる。

「……でも、ウチは怖い……」

「ん……まあそうだな。じゃあ……」

そう言つて、俺は眼帯に手を持っていく。

「この眼帯、どうして着けてるか分かる?」

「えっと……分からないです」

「ちょっとだけ、見せてあげる」

極めて、優しく微笑んで、眼帯を外す。

笑顔とか、似合わないことやってるなあ、なんて思うが、今はおいとく。

目を瞑り、眼帯を取り払う。

「っ……」

刹那が息を呑んだのが分かる。

けれど、それはただ、右頬から額にかけて描かれている、白と黒の『烙印』を見ただけ。

瞼を開けば、また刹那が息を呑んだ。

「眼、が……」

「紅いだろう？ 俺の右眼は」

刹那がコクリと頷く。

「左眼も、黒から蒼になってるだろ？」

また再び頷く。

眼帯『廻無の鉄』は、俺の拘束具。

強すぎる力を封じる為に必要なもの。

今の状態じゃ、“強すぎる力”なんて大層なものは無いに等しいけれど。

「俺も、“人間”じゃないからな」

解放状態を更に深くすると、額の左右が熱くなる。

「お、鬼っ……！」

刹那が僅かに後ずさってそう言った。

「そう……鬼の角」

僅かに隆起し、額を僅かに破って見せたのは、小さな突起物……角。血こそ出ていないけれど、額を破ったから意外と痛みがある。

「分かったかな？」

と言うと、コクコクと慌てて首肯する刹那が地味に可愛く思えた。
眼帯を着け直して笑いかける。

「ほら、もう行きな」

俺はそう刹那に言つて、身体を寝かせて布団を被った。

次に目を覚ましたのは、13時過ぎの事。

流石に寝過ぎたのか、若干身体が重く、そして長い黒髪は寝癖がついている。

身体は縮んでも髪の長さは殆ど変わらないよなあ。

そんな事を考えてしまうのは、こうして身体が縮んだ時にはいつも思う事だ。

立っていても後ろ髪が地面についてしまうのだから、一体どれだけ長いんだって言うね。

元の身長に戻っても、身長169cmで後ろ髪が膝辺りまであるんだから、何とも言えない。

どう言う事か、変な加護があるのか、髪は切ろうと思うと全く切れない。

昔、相轉移系統の魔法で無理矢理切ろうとして、結果としては切れずに終わり、背中に傷がついたくらい。

まあだから、いつもは低い位置で束ねている。

本当に邪魔になる時はリボンで巻いて纏めて、それを服の中に入れたり、首に巻きつけたりなど、よくしている。

その髪も母・木乃葉に気に入られ、毎日弄られるのが日課になりつつあるのは、やめて欲しい所ではある。

屋敷を適当にぶらついていると、庭の一角で木乃香と刹那の姿を発見した。

「……あ？」

二人を見て間抜けな声をあげてしまう。

刹那がその背から小さな白い羽を出し、ピコピコと動かしているのを木乃香が見て喜んでいる。

「……き、昨日の今日とかそういうレベルじゃねえよ」

刹那お前、悩んでたんじゃないのか、それ。

そう思っつてつい膝と手を床につけそうになる。

「あ、戒人兄い！ 見て見て、せっちゃんの羽、天使さまみたいや！」

こっちに気付いた木乃香が俺を呼ぶが、軽く手を振って答えるのが精一杯だった。

本当に、悩んでいたんだろうか。

そんな事を考えてしまう。

で。

「おい、こんな奥まで来て大丈夫か？」

木乃香に連れられて、屋敷裏の森に入って少し奥の所にあるという、川を目指していた。

半ば強引ではあったものの、まあ兎に角、俺は保護者に近い感覚で、刹那は護衛として。

と言う建前こそあるが、木乃香は兄と友人を連れて……と言う事になっっているのだろう。

「だいじょーぶや〜」

軽く、柔らかい言葉で先導する木乃香に対し、苦笑せざるを得ない。

「でもまあ、良かったな。刹那」

そう言ってやると

「はい！」

刹那は満面の笑みで答えた。

川辺まで来ると、そこから木乃香は刹那と遊び出し、最初こそ俺も混ざっていたが、今は木陰で腰を下ろしている。

本心を言えば、あの二人にどう混ざって遊べばいいのか分からない。子供の扱いができるが、自分も子供として遊ぶのは、精神的に若干抵抗があった。

……まあ、1600年で摩耗した老人ですからね。

なんて自嘲気味に言っつて、自分で落ち込む。

「……何してんだ、俺」

本当に。

「あんまり深い所に行くなよー」

「分かつとる」

一応注意はするのだが、相変わらずの声で返事がくる。にしても、本当に心配だな。

それから一時間ぐらい経ち、その間何度も注意する事になったのは、木乃香が危なっかしい所為だった。

刹那はあれでしっかりしているが、木乃香の事になるとちょっと甘い部分があったりする。

そんな結論を出しても、まだ一月も共に暮らしていない今では、早すぎる結論だろうか？

どちらにせよ、木乃香は両親が両親だし、刹那も一緒に暮らし、特に神鳴流師範代のあの二人も居るから、変に歪む事はないだろう。

「……変に干渉するのは、やめておきたいんだけどな」

そう呟きながら、空を仰ぐ。

12年の時間。

それが俺に与えられた猶予にも思える。

『身体的時間』の逆行は、同じく時間の進行で元に戻るのは経験則として知っている。

だから、自分の元の姿に戻るまでの12年間。

自分に与えられた時間は、それだけ。

「逆に言えば、12年の間に何も起きないで欲しいけど」

……ま、無理だろう。

東洋最大の魔力を持った令嬢。

東西の協会の諍いや、過激派の動き。

父上曰く、木乃香と刹那は祖父の居る麻帆良学園へ行く事になる。

それはまだ六年も先の事だ。

過激派から遠ざけると言う意味を持ち、麻帆良学園の学園長であり、関東魔法協会の長でもある、祖父を頼つての事。

それまではここ、総本山で生活し、家族と言う時間を過ごす。

「……ん？」

今更気付く。

真の意味で、俺を近衛家に迎え入れた理由は何だ？

ただ、「息子が欲しかった」と言う理由では、どう考えてもおかしい。

俺自身、刹那と同様に護衛として迎え入れられたと言うのが最大の理由だと思っていた。

けれど、麻帆良に……こう言うては悪いが、封ずるのなら、関東魔法協会が守護する事になる。

無論、生徒個人を守る事はできないだろうが、それでも十分な防壁になるはず。

じゃあ、なんで俺が必要だったんだ？

分からない。

第一、敵視した俺を迎え入れる事自体が不思議だったんだ。尤もらしい、守護の役目と言う理由が用意されたが、それは刹那が居る。

無論、一人のみと言う制約なんてないし、何人付けてもいいくらいだろう。

しかし得体の知れない俺を側に付けるのは、ただの危険行為。

「…………おおう」

急に寒気がした。変な予感がした。

何か、これ以上考えたら嫌な結果にしか辿り着かない。

万が一その時が来たら、父上を本気で斬り付けよう。

その頃には大分“力”も回復しているだろうし、多分余裕。

……………そうでもないか。

いや、その時にはもっと父上も衰えているはずだ。

……………フツ、余裕だな。

今の俺の顔は、結構な悪人の表情になってると思う。そう感じられる。

随分、柔らかくなったものだな、俺も。

一月も経っていないと言うのに……………。

少だけ自分の変化に気付いて、悪人のニヤリ顔をしている自分がおかしくて少し笑う。
その時だった

「ッ……！」

念の為周囲に張っていた結界が人の気配に反応した。
ここは本山の結界の外で、だから結界を張っていた。
本山の人間なら、反応はしないはず。
それなのに、誰かが結界内に入ってきて来て、結界はそれに反応した。

何故？

そんな思考が頭の中を支配する。

俺はすぐに立ち上がり、気配を忍ばせていた巫女に話しかける。

「誰かが結界内に入ってきた。本山に行つて援軍を呼べ」
「はっ」

そこそこの実力者であろう巫女が音も立てずに森を駆け抜けていく。
隠れていた巫女はどうせ父上が付けた護衛だろう。

随分前から……と言うか、本山の結界を出たときから付いて来ていたのには気付いていた。

全く、父上も護衛を付けるなら俺に言っておいて欲しい。

「木乃香、刹那。そろそろ帰るぞー」
「えー、もうちょっとええやんかー」

不満たらたと言った声をあげる木乃香に、我儆な、と一瞬思うが、やはりそこは、あの母上にしてこの子あり、なんだろうか。

「また今度一緒に来よう。次は目一杯遊んでやるから」

そう言うのと、渋々ながらも笑顔を見せて頷いてくれる。

「……でも、ちょっと遅かったかなあ」

がさがさ、と草木の擦れる音と共に出てきたのは、いかにもな人物達。

服装は着物……いや、和服と言うだけで、どちらかと言えば戦闘用の軽装服。

数は七。

呪術師……それも、呪符使いだろうか。

「どちらさまですか？」

木乃香と刹那を庇う様に男たちの前に出て、最初の一言はこっちが貰う。

「おやおや、戒人様ではないですか。こんな所で遇うとは、奇異な事もある」

そう言ったのは初老の男。
見覚えのある顔だ。

「貴方は……確か愛媛の呪術会の……」

「おおっ、覚えておいででしたか。あの時は一目見ただけでしたが」

仰々しいモーションでまさに偶然を装う。

「こんな所で、と言うのはこちらの台詞です。総本山の裏手で遇うなんて、白々しいですよ」

目付きを鋭くして言い放てば、流石に相手も鋭くなる。

本当に“こんな所”で遇うとはね。

一体何をする心算なのやら。

「それで、木乃香でも誘拐しに来ましたか？」

「なっ……」

どうせそのくらいだ、と思って言っていると、相手は表情を強くする。

驚きの声をあげたのは刹那だ。

「はぁ……」

動きが早かったと言う事に対して、それを読めなかった自分に、そして運悪く、成り行きとは言え“俺”の家族を狙った相手に、

本当に溜め息が出る。

「刹那、木乃香を任せる」

「え……はい！」

「ちょ、戒人兄い？」

「本山に向かって走れ。いいな？」

両手を左腰に添え、左手は鞘を握る様に、右手は柄を掴む様に。

「来い、来電」

その名を呼んで、右手を振り抜き、抜刀状態で自分の愛刀を召喚する。

「さて、アンタ等は義理とは言え俺の妹を攫おうとした。

死ぬ覚悟は、あるんだよな？」

ニヒルな微笑みと共に、雷を振るう。

「雷迎招来」

放電音と共に雷を呼び、切っ先から雷を放つ。

悲鳴を他所に軽く地を蹴り、瞬動で男達の中央に入る。

「ハッ！」

一振りで呪符使いらしい男を肩から斜めに斬り裂き、振り返り様に一閃。

肉の焼けた臭いが鼻につく。

斬った瞬間に放電し、肉を焼いている。

「し、式神……！」

「指光」

こちらに対応しようとした呪符使いの符に向けて、左手の指先から雷を放って符を焦がす。

「つまらんな、貴様等」

意識は既に目前の戦いへ。

ただ冷徹になって、殺す選択を選ぶ。

（雪村流雷迎式……らいかせんしゅうざん雷華穿衝斬）

身を捻りながら来電を振るい、周囲の男達目掛けて雷撃を放つ。
そして視界は全て、光に包まれた。

「こ、これは……」

雷光で目が眩んだまま一分ほど経った頃、誰か声が耳に届いた。
轟音のお陰で耳も若干遠い。

「戒人、君がやったのかい？」

声にそう聞かれ、父上であると判断する。

やはり強化も防壁もなしで使うにはデメリットが大きかったなあ、
なんて思いながら、久方ぶりに感じる、肉の焼けた臭いと血の臭い
の漂う空気を吸う。

戦場の臭いだ。

「俺がやりましたよ。木乃香を狙った、過激派だったようなので」

視界が戻り、聴覚も正常に機能し始め、そう言う。

「なっ……」

父上の顔には驚愕の色が宿る。

「でも……当分はもう大丈夫でしょう。

誰一人帰ってこず、総本山から通達もなければ、どうなったのかは誰も知らない。

なのに刺客は帰ってこなければ、警戒するには充分だ」

そう言い放ち、来電に付着した血を放電しながら振るう事で完全に掃い、鞘に収めて来電を消す。

「とは言え、これから何度も木乃香が狙われる事になる。可能な限り、早めに対処した方がいいですよ」

身体が重いを感じながらも、努めて冷静に言う。

視界には焼けた木々が入ることから、かなりの氣を込めてしまったようだった。

制御がし難い。

この身体でもう一度鍛練し直す必要がある。

「いや、助かったよ。……戒人、大丈夫かい？」

「……ちよつと、大丈夫じゃないかも」

ああ、また氣を失うんだ、俺。

そんな事を考えながら、この世界に来て、二度目に、意識を手放した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7288y/>

世界の漂流者 in ネギま

2011年11月24日21時49分発行